

共同研究「^{くにざかい}国境の歴史文化」の展示

歴史文化学科教員

丸山裕美子 上川通夫 大塚英二 樋口浩造
與那覇潤 山村亜希 中島茂 井戸聡 川畑博昭

はじめに

本年度（2010年度）7月3日（土）から9月26日（日）の間、愛知県陶磁資料館の企画展示室の一角において、本学科教員による共同研究「^{くにざかい}国境の歴史文化」の成果の一部を展示として中間報告させていただく機会を得た。この稿は、その展示内容を、実物展示資料の写真とそれについてのパネル解説文とを誌上にて再現しようとするものである。

歴史文化学科教員で取り組んでいる共同研究「国境の歴史文化」について、趣旨と経緯の概略は、以下の稿の冒頭に述べているとおりである。愛知県陶磁資料館の展示スペースをお借りしての成果発信については、ここで簡単に触れておきたい。

1998年（平成10）に愛知県立大学が長久手町大字熊張に移転してきたことで、愛知県陶磁資料館（瀬戸市山口町）とは文字通り近隣に立つこととなった。直線距離では1キロたらずであり、さえぎるものない丘陵地で、互いに望見しあう位置である。一方は研究と教育、他方は研究と啓蒙普及と、関連しつつ独自の役割をもっている。その連携は、単純な足し算以上の威力を引き出すことと予想されるが、これまで長く助走期間を過ごしてきた。近時、地域に根ざした良質の学術活動を展開する将来展望の現実化に向けて、両者の協力関係が具体化しつつある。その場合、歴史という領域においては、歴史文化学科が陶磁資料館との共同事業を進める可能性をもっている。

愛知県陶磁資料館では、昨夏に愛知県陶磁資料館企画展・愛知県埋蔵文化財センター埋蔵文化財展として「1000年前のハローワーク」を開催された（本稿末尾に参考資料を掲げた）。その関連での同時開催として「愛知県の歴史学—県史編さん室と県立大学の挑戦—」のコーナーが設けられた。ここに、小規模ながらも、歴史文化学科の共同研究成果について発信するよう呼びかけていただいた。そのような事情で実現したのがこの展示である。共同研究はなお継続中であり、よりまとまった形での成果発信を別に準備しているが、公共施設での展示という形式は、連携事業ならではの新鮮な経験であった。学科教員はもとより、展示準備を経験させていただいた学芸員実習生、リピーターとして展示観覧する意味を自覚させていただいた一般学生など、本学と陶磁資料館の近い距離を実感できた。

企画展示を担当され懇切にご指導くださった学芸員小川裕紀さんと、数々のご配慮をくださった学芸員森達也さんはじめ、愛知県陶磁資料館の方々に感謝申し上げる。

本稿は2010年度愛知県立大学学長特別教員研究費による研究成果（研究課題「国境の歴史文化—研究と教育の方法的な実践—」）の一部である。

愛知県立大学日本文化学部 歴史文化学科

愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科は、“日本の歴史と文化”について総合的・専門的に教育・研究する場です。日本の歴史文化を二つの観点から探究しています。

一つは、歴史に興味ある人の居場所です。古代・中世・近世・近現代にわたって各分野を専門とする教員が教育研究に当たっています。それぞれの時代の個性、歴史の進路についての可能性、価値観や意志による歴史の選択、現実がどのようにある歴史的理由、将来展望の糧としての歴史観等々を専門的に研究し、教育しています。

もう一つは、現代日本を見すえる人文・社会の研究分野です。社会学・地理学・法学といった専門分野から、人間自身が織りなす社会文化の実態を、多角的に探究します。人間と人間社会に関心ある人が、複雑で矛盾に満ちた文化の実質を見きわめて、この社会の将来展望を描く手がかりを探ります。

本学科には、9名の教員が所属しています。新進気鋭の若手から経験豊富なベテランまで、個性的、意欲的なメンバーが、一致協力して歴史文化の教育研究、学生指導に取り組んでいます。その研究成果の一端を今回の展示から垣間見ていただき、歴史文化研究の面白さを少しでも感じ取っていただければ、望外の喜びです。

最後になりましたが、本展示会のために貴重な資料をご出品いただいたご所蔵者や、さまざまなご協力をいただいた関係者の方々に深く御礼申し上げます。

2010年7月

愛知県立大学

日本文化学部歴史文化学科

共同研究 「^{くにざかい}国境の歴史文化」

愛知県立大学は、尾張・三河・美濃の三国国境に近い。未来に進むべき現代人の認識からは脱落しがちだが、来し方、この地には豊かな歴史文化の個性が刻み込まれてきた。中国に範をとった高級陶器の発信地たる猿投や瀬戸、中近世の節目にかかわる長久手の戦い、国際イベントとして計画された愛知万博、それに愛知県立大学。それらがこの場所を舞台にする理由については、未解明の必然性があるのかもしれない。

^{くにざかい}国境という場は創造性に満ちている。文化が接触し交錯する境界地域は、時に歴史の前線として表舞台に立つことがある。価値観と意志ある生活者の地域づくりが意識される時、個性的な歴史文化を創造する活力がひき出される可能性をもつ。そのことを歴史の中に探り、現状において見出し、将来の展望に生かしたい。

共同研究では、重層的で多元的な^{くにざかい}国境の実態を、地元地域、日本列島、東アジア、地球世界、といった様々な次元で考察している。とくに歴史文化という時間軸に留意するのは、境界の生成・変化・消滅・賦活といった動態をとらえたいからである。そのことは、世界認識の方法を模索することにもつながるであろう。

この共同研究は、9人の研究領域の結節点を求め、また教育との連動を視野に含め、2007年度より開始した（2008年度・2010年度愛知県立大学学長特別教員研究費受給）。各研究分野は、お互い遠すぎず近すぎず、刺激と発見を得て自分の持ち場を見つめ直す距離にある。学術研究の実際による学科運営は、構成員の積極性をよく動機づける。演習をはじめとする教育に連動させることも可能であり、現地での見学や調査は、通常のカリキュラムとは異なる幅と深さを増すことになる。

本展示は、共同研究の一部を紹介するものである。今後の継続的な成果発信を見守っていただければ、一同幸いに思う。

2010年7月

愛知県立大学 日本文化学部歴史文化学科

日本古代における二つの「国」の成立

—「日本国」と「尾張国」「三河国」—

歴史文化学科 教授 丸山裕美子

7世紀後半から8世紀初にかけて、日本列島に二つの「国」が成立した。国際社会における国号としての「日本国」の成立と、地方行政単位としての「国」、例えば現在の愛知県を領域とする「尾張国」^{おわりのくに}「三河国」^{みかわのくに}などの令制「国」^{りょうせい}の成立である。

中国の史書『漢書』^{かんじよ}に「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国となる」と記されたように、列島はもともと多くの「国」によって成っていた。それらの国々は5世紀には「治天下」^{あめのしたしろしめす}大王のもとに統括されることになる。この統括された領域は対外的に「倭国」^わと称するが、内部は「軍尼（クニ）」（『隋書』）と呼ばれる地域に分けられていた。

倭国を改めて「日本国」が成立したのは、大宝元年（701）^{たいほう}度の遣唐使が、^{けんとうし}当時の中国（周）に「日本」国号を名乗り、皇帝（則天武后）^{そくてんぶこう}がこれを承認したことによる。近年中国で発見された遣唐留学生の墓誌^{るがくしやう}（734年没）^{ほし}にも「国号日本」と記されている。

注目したいのは、地方行政単位としての「クニ」に「国」の文字をあてたことの意味である。日本の古代国家が範とした中国隋・唐^{ずい}の地方行政単位は、州・^{とう}県で、日本の「国」にあたるのは「州」である。なぜ「クニ」の文字として「州」を採用せず、「国」を選んだのか。天下の諸国を統治していることを表象するために積極的に「国」文字を採用したと評価をするか、あるいは伝統的な『漢書』に記された百余国以来の一をそのまま継承しただけと消極的な評価をするか。二つの「国」の成立と「国境」意識について、あらためて考えたい。



地方行政単位としての「国」の成立については、最近出土の文字資料によって具体的な過程が明らかになりつつある。石神遺跡（奈良県・明日香村）出土の「乙丑年（665）」木簡は「国」表記のもっとも早い例。長久手町出土の刻書須恵器には「国」は記されていない（省略されただけの可能性もある）。

右：刻銘須恵器／7世紀後半／長久手町・市ヶ洞1号窯出土／長久手町教育委員会所蔵

「盆五十戸佐加之」

「佐加之」は人名。奈良県明日香村の石神遺跡からも「盆五十戸」と刻書された壺が出土している。

左：木簡（レプリカ）／665年／明日香村・石神遺跡出土／奈良文化財研究所所蔵

「乙丑年十二月三野国ム下評」「大山五十戸 造ム下ア知ツ／従人由ア見安」

「乙丑年」は天智4年（665）、「三野国ム下評大山五十戸」は『和名抄』の美濃国武芸郡大山郷にあたる。「ム」は「牟」の「ア」は「部」の略体字。「国一評一五十戸」のかたちで記されたもっとも古い木簡である。

写真提供：奈良文化財研究所

中世の地域社会と仏教

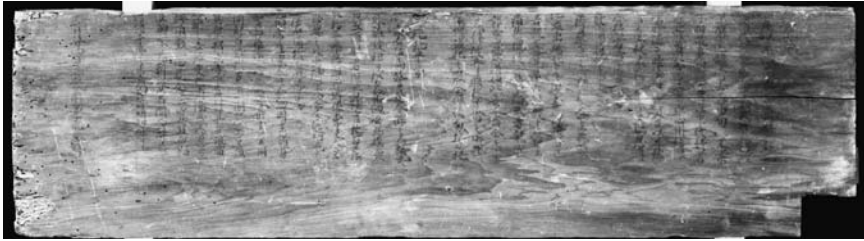
—新発見の木札文書—

歴史文化学科 教授 上川通夫

三河国と遠江国との国境地帯には「山林寺院」が多い。それは、12世紀ごろを節目として、日本社会が本格的に仏教を導入したと関係がある。船形山^{ふながたさん}普門寺（愛知県豊橋市）の再生は、その具体例として注目される。ここに紹介する起請^{きしょうきふだ}木札は、近年になって寺内から見いだされた。中世世界の形成を告知する掲示板として、また、あたらしい地域づくりを担う住民の結束記念碑として、希有の価値をもつ。

板に墨書された文書という特異な形状である。上部が欠けている。別の板にこれより前の文章があったかもしれない。残っているのは、三か条^{いまし}の戒めと、仏^{みょうおう}・明王^{ぜんしん}・善神らへの誓いをうながす結びの文章、それに年月日と真言密教僧永意の署名を記す最終行である。経典類を引用した文章はとて難解である。一条目（1～9行）は僧侶同士の争いを、二条目（10～17行）は盗犯を、三条目（18～24行）は姦淫を、それぞれ禁止している。山寺の修行僧たちへの戒めとして、本尊^{くうでん}の宮殿（厨子）に掲げられていたらしい。船形山腹一帯に堂舎を営み、大勢の僧侶を抱えた時代に、内部の規律が必要だったのであろう。

一見、世俗離れた生活規範にみえる。しかし実はここに、一族から僧侶を送りこむ近隣^{ちかご}村里の人々の、願望や意志を読みとることができる。この時代の新しい動向として、夫婦一对で営む家が自立し、それらが地縁の地域社会をつくりはじめていた。村落を形成し、さらにはその複数が連合することで、実力を第一とする時代を生き抜こうとしたのである。その際の工夫として、かたよりない平等の普遍思想というべき僧伽^{さんか}・和合^{わごう}の戒律思想を導入して、自らの結束をはかった。地域社会の「里山寺院^{さとやまじいん}」として再生した中世普門寺は、起請^{きしょう}なる文書の様式で、新時代への出発宣言文を掲げたのである。



- 〔〕 聖事
 - 〔〕 座以柔和為衣袋、何好諍論
 - 〔〕 閑於無益事專論哉、宝積經
 - 〔〕 必遠離當去自由旬云、又案
 - 〔〕 互相敬重如觀世尊云、末代行者
 - 〔〕 聚散莫念惡、事乖心則結恨
 - 〔〕 膠漆之醜、法侶行違以可然
 - 〔〕 常受杖木於僧依之難忍等
 - 〔〕 令行者垂世幾真、
 - 〔〕 致險空難事
 - 〔〕 於惡惡之心關亂之念生於眼
 - 〔〕 他雖出攝勢之過不敢以獲貴亡
 - 〔〕 若親父母兄弟六親殺生輒生
 - 〔〕 痛於親徒之箭毒戒戒龍命亡
 - 〔〕 輒心惡厭難如此、善人盡失公平、
 - 〔〕 戒律彼存屬於放印之誣掛
 - 〔〕 依懼盜犯之疑令禪徒勿犯勿犯
 - 〔〕 女犯聖事
 - 〔〕 姪者世俗尚賢、是令冬之所禁也
 - 〔〕 外護致惡疑矣、輪廻無端、婦室
 - 〔〕 五通取者、深著拜喜於皇后
 - 〔〕 粉手羅結製印關係李夫人之
 - 〔〕 忍要之外出鄉里而無及信宿之世
 - 〔〕 座右備於廢忘真、
 - 〔〕 願常住界舍不動明王誦經、
 - 〔〕 伽藍護法十八尊神、各舉玄鑑同
 - 〔〕 圓却百怪於万里、期終居之後
 - 〔〕 冥衆攝出身中、實動其身現當
 - 〔〕 聖之世、結交於府以、或為男色
 - 〔〕 緣須凝、心、折念、寶寶樂加
 - 〔〕 退転不為利要名聞而致唯
 - 〔〕 相傳子仙之出世、仍起請如件
- 正月廿四日遍照金剛弟子永意敬白

えいいきししょうきふだ
永意起請木札

永曆二年（1161） 普門寺（豊橋市）所蔵 縦31.8cm 横116.0cm 厚1.9cm
 末尾に署名する永意は普門寺僧。起請は發起を意味する。中世寺院としての復興に際して作成され掲げられた寺院法である。寺僧らが風紀を正して結束するよう戒める。その背後には、寺を支える里人によるあたらしい地域社会づくりという、新時代の動きがある。年号部分などが欠けているが、近世文書に写しとられていた。近年本尊の厨子内から発見された。



元禄十三年濃尾国境の山論 —元禄十四年濃尾国境争論裁許絵図及び同裏書—

歴史文化学科 教授 大塚英二

幕府による元禄国絵図作成の影響によって、元禄13年（1700）から美濃国笠原村と尾張国上・下半田川の間で争われていた国境をめぐる入会山争論は、翌14年に幕府評定所の裁許が出され、尾張方の勝利となって終決した。この裁許絵図は、決着したその境界＝ラインを明示し、評定衆がそこに押印して確認したものである。

絵図の裏書は裁許文言で、まさに判決内容そのものである。国境のラインは山の谷間にあるという美濃方の主張よりも、嶺通の古道を境界とする尾張方の主張が受け入れられているが、これは一般に境界が稜線である場合が多かったからである。また、かつて国境を含んだ境界山への入会は許可されていたとする美濃方の主張についても、植林や山畑年貢等の事実から尾張藩にとってあり得ないことと断じ、尾張方の国境までの内には一切入会できないと認定されたのである。

これまでおそらく帯状であったと推定される曖昧な国境のラインは細い線となり、嶺通り上にラインが引かれ、そこを越境して山に入ることは互いに禁じられることになった。全面的な尾張方の勝利のようにも見られるが、これは山を利用する一体的な地域の分裂ともいえる。元禄国絵図は境界を明確にする指向性が強かったために地域社会での曖昧な線引を一蹴したが、それにより地域間での矛盾が顕現化し、ここに近代に続く新しい境界が誕生したともいえる。



元禄14年(1701)6月 濃尾国境争論裁許絵図
原本：縦144.5cm 横299.0cm 瀬戸市上・下半田川自治会所蔵
写真展示

対外戦争と追悼

—日露戦争と英霊人形—

歴史文化学科 教授 樋口浩造

この5体の通称「英霊人形」は、岐阜県美濃市善光寺の英霊堂内に安置されているものである。

日露戦争（1904～1905）は、近代国家として全国各地で大きな犠牲を出した最初の対外戦争であり、また同時に日本が帝国主義国家の一角をなすきっかけとなった戦争でもある。戦死者の様々な追悼が、手厚く、また盛んに行われた。この時期に、小倉山善光寺では生前の写真をもとに、戦没者の人形を製作するという、現在からみれば極めて珍しい形式での追悼が行われた。名古屋のからくり人形師、六代目玉屋庄兵衛の作とされ、身の丈約65cm程度、軍服を纏い、眼球にはガラス玉がはめ込まれている。写真をもとに、かなり精巧に作られており、個々人の顔立ちの違いも判然としている。背には溝が掘り込まれており、遺髪等が納められているとされる。一体ごとに法名・所属部隊・位階を記載した札があり、木像背部にも故人の氏名が記されている。

日露戦において、岐阜県では3668名の犠牲者を出したが、武儀郡出身の282名のうち、上有知町（こうづちまち）の有志が発起人となって名古屋に木像を発注し、当初170体が製作された。アジア・太平洋戦争後、処分を免れるため遺族に返却されたが、引き取り手のないもの、あるいは再び堂内での安置を希望して持ち寄られたものが現在95体のこされている。また、こうした人形による追悼は、他に北海道2箇所、静岡県、群馬県の計4箇所で確認できる。



※1 写真は美濃善光寺英霊堂内を撮影したものであるが、実際の展示はこのうちの5体を借り受けて行なった。

※2 また展示に際しては、以下の呼びかけを行なった。

日露戦後100年以上が経過し、人形の傷み・劣化がすすんでいる。一部の方の善意によるだけでなく、歴史的かつ文化的なあるいは地域的な資料として、貴重な人形の保存を真剣に考えるべき時期に来ていることを訴えたい。

琉球弧のなかの「国境」

—①「糸満人」と白銀堂 ②宮古島南端の“独逸”—

歴史文化学科 准教授 與那覇潤

①今日では日本の「国境」地帯として知られる琉球弧。しかし、その内部にも実は、さまざまな境界があります。沖縄本島南部で漁業をもっぱらとした糸満の住民は、ある時期まで「日本人」や「沖縄人」とは異なる種類の人々だと語られてきました。

明治末、学問的な人種論や民族論の知識が沖縄に入ってくると、地元の伝説や体格の差異などを根拠に、「糸満人は人種が違う」という言説が流行します。糸満の人々の信仰対象だった白銀堂も、「白人堂」に由来するものとして異人種論の根拠とされました。大正にかけて、「国境」を越えて遠洋漁業に活躍する彼らに好意的な際には、糸満人は「優秀な白人」の子孫とされ、逆にダイナマイト使用などの危険な漁法が非難を集めると、「野蛮なマレー系」の血筋だなどといわれました。

転機が訪れたのは昭和初期です。1932年、白銀堂は海外への移民も含めた地元出身者の献金により、神社として再スタート。寄付金集めに活躍した「門中」という親族組織が、軍国主義が強まる中、「日本の伝統である家族精神」を象徴するものとして注目を集めました。さらに戦線が拡大すると、「国境」をまたいで大海原に漕ぎ出してゆく彼らの活発な活動は、日本人の海外雄飛のモデルとされたのです。

この国で「国境」にこだわらずに生きる人々に寄せられてきた、賞賛・羨望・嫉妬・中傷。かつて「糸満人」と呼ばれた人々の軌跡は、「国境」を考えることの難しさを問いかけています。 與那覇潤 「糸満人」の近代」吉成直樹編『琉球弧・重なりあう歴史認識』より

②太陽と青い海で知られる沖縄県宮古島の最南端の浜辺に、なぜかドイツ西方・ライン川沿岸の古城が原寸大で建つ不思議な光景。この奇観の由来は100年以上前に遡ります。

明治が始まってまもない1873年7月、ドイツ商船ロベルトソン号が宮古島南方で座礁。南岸の上野村の人々が乗組員救助に活躍しました。ドイツ皇帝ヴィルヘルム1世は3年後、感謝の辞を刻んだ石碑を送りますが、これが建てられたのは上野村ではなく、同島の主要港だった西岸の漲水で、その記憶もしいに風化していきました。

この挿話が突如として思い出されるようになったのは、1930年代のこと。文部省による小学校の教材募集コンテストで、ドイツ商船救出物語が一等を受け、37年から4年生の修身教科書に掲載されたのです。当時の日本がナチスと急接近中だったことが追い風になりました。1936年11月、上野村に近衛文磨の揮毫で皇帝感謝碑60周年の記念碑が新設、除幕式では日の丸とハーケン・クロイツが全島に翻りました。

戦争が終わっても、戦前にみんなが盛り上がった物語は衰えません。沖縄が日本に返還された1972年にはドイツ船救助の百周年祭が挙行政され、1992年にリゾート施設「うえのドイツ文化村」が着工すると、近衛の記念碑も施設内の新しい台座に移されます。2000年7月の沖縄サミットではドイツのシュレーダー首相が来訪しました。

「国境」を越えて人々が助けあった美しい記憶も、決して政治と無縁ではないことを、宮古島のキッチュな光景は教えてくれるのです。

参照：岩本哲『博愛』、「宮古島の人々」うえのドイツ文化村にて販売

琉球弧のなかの「国境」①

“糸満人”と白銀堂

下：現在の糸満市の白銀堂入り口、鳥居の奥に赤い瓦の社が臨める
 右：境内に立つ昭和7年に建立（神社化）された由の石碑には「白銀
 神社改築期成会」とある
 社の壁面には献金拠出者の一覧が掲示され、「門中」単位での寄
 付も目立つ



琉球弧のなかの「国境」②

宮古島南端の“独逸”

上：1996年開館の「うえのドイツ文化村」内、南海の波打ち際に聳えるマルクスブルク城の原寸大再現
 左：同施設内の記念碑。裏面に昭和11年建立と見え、表面は半年後に首相となる近衛文麿の揮毫とある

①②写真展示

(五〇)

戦国時代「国境」の都市・村・城

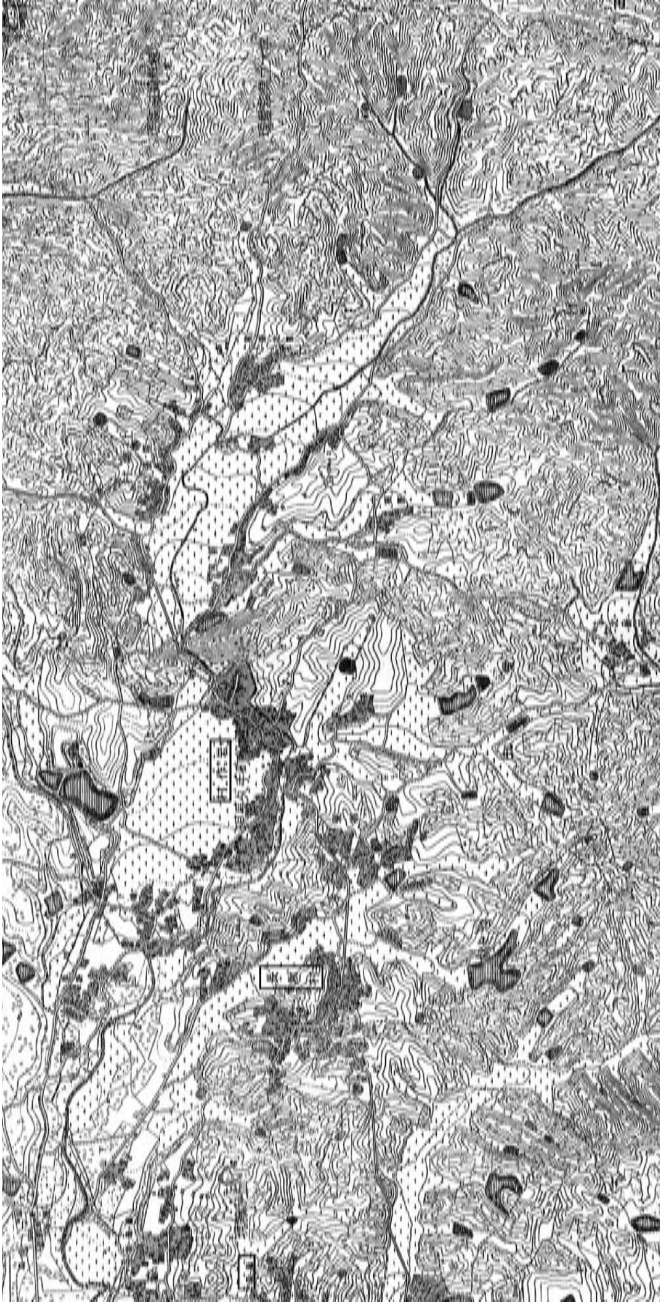
—地図から歴史を読む—

歴史文化学科 准教授 山村亜希

歴史地理学は、過去の景観を地図上に「復原」し、そこに刻まれた歴史を考える学問分野です。例えば、戦国時代に信長・秀吉が目指した首都・京都は、どのような「かたち」をしていたのでしょうか。今、私たちが訪れる京都とは、全く異なっていたはずでず。歴史地理学の「復原」では、様々な歴史史料をもとに、戦国時代の京都マップを作ります。この復原図を手にするすることで、信長の泊まった本能寺は、当時の京都のどこにあたるのか、どうしてその場所が宿泊地として選択されたのか、秀吉の聚楽第は当時の京都ではどこに位置するのか、なぜその場所が秀吉の本拠として選ばれたのか、といった、数々の歴史の謎に迫ることができます。ときにそれは、よく知られた通説の見直しや、新しい歴史の発見にもつながります。

このような歴史地理学の「復原」は、私たちが暮らしている愛知県の身近な地域でも、応用できます。とはいえ、史料が多数伝わる京都とは違って、愛知県の戦国時代の景観を「復原」するために利用できる歴史史料は、それほど多くありません。しかし、かつての原景を記録した地図(江戸～明治期)を丹念に「読む」ことによって、それより古い戦国時代の痕跡を探し出すことができます。このような方法によって、戦国時代の尾張における城下町や港町の「かたち」を地図化し、この地域の景観の「個性」を見出すべく、研究を重ねています。

それでは、尾張・三河の「国境」に位置する長久手は、戦国時代には、どのような景観だったのでしょうか。長久手というと、小牧・長久手の戦いが有名ですが、合戦の行われた舞台は、どのような「かたち」をしていたのでしょうか。長久手の復原図作成に必要な歴史史料は、十分とはいえません。しかし、明治期の地形図には、それを遡る約三百年前の城や町、村の痕跡が、いくつも残されています。これらを読み取りながら、一步一步、戦国時代「国境」の景観に接近する研究・教育を行っています。



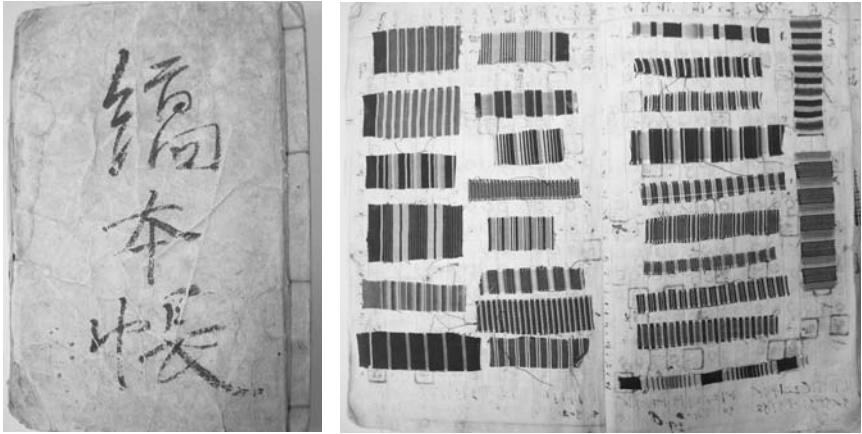
明治期長久手の景観

明治44（1911）年陸地測量部発行20000分の一正式地形図「長湫村」。長久手は、丘陵に無数の谷が入り組む、凹凸の激しい複雑な地形であった。水の得やすい谷は大部分が水田とされ、水はけのよい丘陵の麓に集落が立地していた。

国境を越えた物づくり
—近代尾張地域の織物生産—
歴史文化学科 教授 中島茂

人文地理学は、人間の営みが地表にさまざまに刻印された様子を捉え、対象となる現象や地域の地理的な特性や法則性を明らかにしようとする学問分野です。人間の営みには、産業活動や日常的な生活行為、都市や農村での諸活動など、さまざまな面がありますが、とくに近代・現代を対象とした工業立地や織物産地などの工業地域のあり方—そうした地域がどのように形成され、どのような特性をもち、どのような課題を抱えているのか—を、調査研究しています。大阪を中心とした西日本をおもに見てきましたが、愛知県立大学着任を機に、東海地方にも目を向けています。

愛知県は今では自動車工業が盛んですが、もともと綿織物や絹綿交織物、毛織物の我が国有数の産地です。尾張、三河両地方とも江戸期からの有力な織物産地ですが、尾張には木曾川、揖斐川を経て大垣から陸路琵琶湖岸の長浜へ向かい、舟運で天津から京、大坂へ通じる物流ルートがありました。まさに国境を幾つも越えた取引や物の流れが、この地方の織物生産を支えていました。ここでは旧尾西市の有力機業家であった鈴鎌毛織の明治大正期の織物生産や取引の様子を示す資料を、現当主のご厚意により展示しています。当時の織物生地見本である縞帳や、梳毛糸を使ったセル地の着物、関東大震災で被災した東京の取引業者が振り出した約束手形、寄宿女工の三食の献立表など、珍しい貴重な資料です。



絹綿交織 表紙(左)と見開き(右)(明治31年)

明治31年に鈴鎌で作成された絹綿交織物の縞柄の見本帳です。使われなくなった古い帳簿の和紙の裏側を利用して、商品見本となる縞柄の端切れを張り付け、商談に使用されました。明治後半になると、絹綿交織から毛織物へと製造品目の中心が変化していきますが、尾西・一宮では、鈴鎌に限らず、当時は絹綿交織物の製織が盛んでした。のちには毛織物であるセル地(サージ)の縞帳(見本帳)も作られました。

熊野川の筏流し

—木材の運び屋・筏師の技と道具—

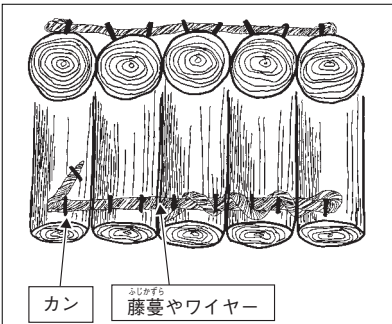
歴史文化学科 准教授 井戸聡

みなさんは「筏^{いかだ}」と聞いてどのようなものを思い浮かべるでしょうか。無人島から脱出するための筏、筏レース、海釣り愛好家は筏での魚釣りを思い起こすかもしれません。ここで紹介するのは林業の一環としての筏^{いかだ}です。林業では山々から木を伐り出します。切り出した木を運搬しなければなりません。現在のように道路事情が整っておらず、トラックなどの輸送力も存在しなかった時代に、川の流れを利用して合理的・効率的に木材を運ぶ技術として発達したのが筏流しでした。つまり、ここで紹介する「筏」とは、筏そのものが運搬される品物だったのです。人を乗せるための「乗り物」ではありませんでした。

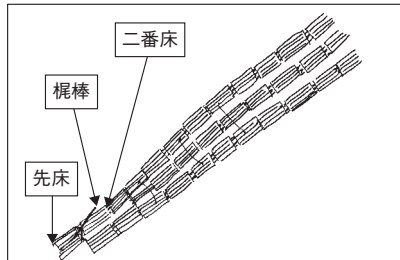
奈良に発し、和歌山・三重の県境を通る熊野川では昭和30年代まで盛んに筏が流されていました。流域の木材はその一帯の木材集積地である熊野川河口(新宮市)まで筏に組まれて運ばれていました。増水や渇水、急流や淀み、寒さ暑さや障害物と変化に富む川を相手にする筏乗りは体力や技術、経験が必要とされ、危険も伴う大変な仕事でしたが、その分高賃金でした。熊野川流域には20近くの筏組合があり、筏仕事の請負や差配をしました。

今回は熊野川沿いの「筏師の村」である土河屋に残されていた筏に関する資料を紹介します。

最後になりましたが、本展覧会のために貴重な資料を出品いただいたご所蔵者、ご協力いただいた関係者の方々に深く御礼申し上げます。



〈筏を組む〉
 藤蔓やワイヤーを渡してカン(鉄製の連結部品)で木材を打ち留めて「床」を組んだ。



〈筏の全体図〉
 「床」を12床連結して「一幅」とし、一つの筏とした。川幅の広い下流では二、三幅を連結して一つの筏(一荷)とした。全長は約50m。筏乗り1～3人で大型トラック一台分以上の木材を数十km運んだ。

- 筏仕事の道具：筏仕事には筏流しの他、筏を組む仕事(編筏)があり、約4mの材木7、8本を並べて「一床」、これを12床連結して「一幅」とし、一つの筏とした。川幅の広い下流では二、三幅を連結して一つの筏とした。流筏や編筏には様々な道具が使われた。
- 藁：雨具(菅で編まれている)(大正～昭和初期のもの)／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵
- 山鷹：木材を運ぶ道具(柄の部分は竹製)(昭和10年頃のもの)／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵
- カン：筏をつなぐワイヤーを打留めする道具(鉄製)／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵
- カン斧：編筏に使う道具(カンを打つ部分と刃先(斧)がある)／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵
- カン抜き：(カンを打つ部分と抜く部分がある)／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵
- 筏綱：筏に係留する道具(木綿製)／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵
- 竿尻：筏流しに使う筏竿という道具の一部(鉄製)／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵
- 切判切り：木材に所有者の印を切り込む道具／和歌山県本宮町土河屋 浦野都平氏所蔵

異文化の到来、自文化の発出

—スペイン人の「日本王国記」と南米ペルーへの日本人移民—

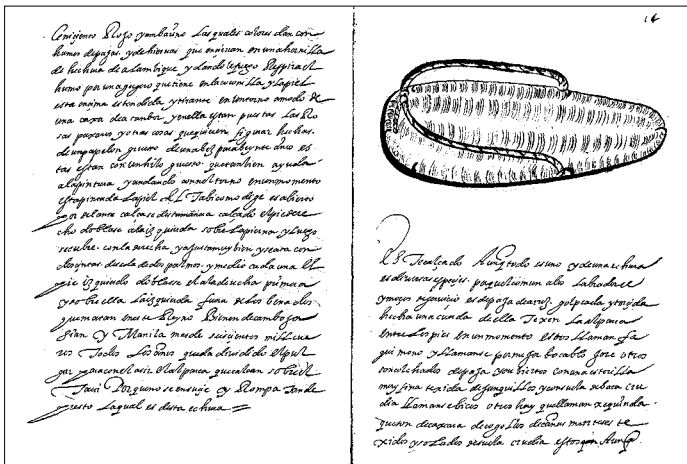
歴史文化学科 准教授 川畑博昭

現在、愛知県には数多くのブラジルやペルー出身者たちが居住しており、愛知県は今や日本における「ラテン文化」の発信地ともいえる。地域に根ざす愛知県立大学も「多文化共生」を掲げるが、ここで紹介するのは、日本の歴史にはこうした「多文化共生」の経験がすでにあったことの一例である。

欧文の史料は1615年にスペイン商人ベルナルディーノ・アビラ・ヒロンによる『日本王国記』（佐久間正、会田由、岩生成一訳『大航海時代叢書 XI』岩波書店、1965年）の写本である（スペイン・エル・エスコリアル・サン・ロレンソ図書館所蔵）。彼は16世紀末から17世紀初めの約20年間日本に滞在したが、時は、日本における南蛮人による鉄砲伝来やキリスト教の布教がさかんな日本の「異文化との遭遇」の最中であった。全23章229頁から成る大部のこの記録は、最初の3章分を日本の生活様式、宗教などに関する記述にあてており、そこには鋭い洞察力がうかがえる。当時の多くの記録が宣教師によって書かれたなかで、一般人による『日本王国記』は異彩を放っている。

もう一つの資料は、19世紀後半から本格的に始まる日本人の南米移民に関するものである。ここに紹介するのは1918（大正7）年にペルーへ渡った鹿児島県出身の夫婦（城ノ下^{しろのしたけさきち} 畷吉・白澤フミ）の移民手続関連文書と彼らの子孫の写真である。1899年に始まるペルーへの日本人移民者等は、その後の日米開戦で帰国の夢が絶たれ、想像を絶する苦難の時代を経て、現地ペルー社会に根づいていった。現在その子孫は10万人ともいわれ、南米ではブラジルに次ぐ規模の「日系社会」を形成する。

日本は異なる時代に彼我の地で「異文化との遭遇」を経験していたのであり、日本文化は決して内向的なだけではなかった。これらの事実は我々に、文化を比較的に捉える姿勢が、常に複眼的なものでなければならないことを教えてくれる。



『日本王国記』（正式名称:『転訛してハボンとよばれている日本王国に関する報告』）

ベルナルディーノ・アビラ・ヒロン(Bernardino Avila Giron)著、1615(元和元)年(スペイン・エル・エスコリアル・サン・ロレンソ図書館所蔵)。全229頁23章から成り、当時宣教師以外の一般人によって書かれた稀有な記録。著者は日本(主として長崎)に約20年住んだスペイン人商人。写真の絵は「草履(Joreと表記された)」。

写真展示



『日本人ペルー移住者夫妻の記録と子孫たち』

しろのしたけさち

城ノ下駄吉・白澤フミ夫妻、鹿児島県出身、1918(大正7)年渡航。

ペルーの首都リマ郊外のサン・ニコラス耕地に雑貨店を経営。9人の子どもたち(二世)はいずれもペルーで生まれ、うち6名(女5名、男1名)が存命。現在はその曾孫(四世)まで誕生している。

(四二)



展示室のようす



見学の様子

